

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

ヘンリー八世の「小」修道院解散について(2) 1535年の視察調査を中心に

著者	工藤 長昭
出版者	法政大学史学会
雑誌名	法政史学
巻	28
ページ	90-109
発行年	1976-03-23
URL	http://hdl.handle.net/10114/10240

ヘンリー八世の「小」修道院解散について (二)

——一五三五年の視察調査を中心に——

工 藤 長 昭

目 次

- はじめに
- 一、 値踏み調査委員
- 二、 一五三五年の具体的指令（以上前号掲載）
- 三、 視察者とその性格（以上本号掲載）
- 四、 視察状況
 - 視察者のクロムウェル宛書簡を中心に —
- 五、 報告書の内容
おわりに

二、 統・一五三五年の具体的指令

すでにみたように、⁽¹⁾ 八六個条の調査命令書 (The 86 Articles of Enquiry) および⁽²⁾ 二五指令 (The 25 Injunctions) は、修道院生活を堪えられないものとし、修道院抑圧への場を準備するために予め画策されたものであった。そのことについては、ある点において Gasquet 説とほとんど異ならないものであるということが確認されるのであるが、⁽³⁾ しかしこの二つの史料に関しては

さまざまなセンスで解釈されているゆえに、われわれはもっと綿密になるべく各条項に当たって検討を加え、再吟味してみる必要があると思われる。そこで、以下、主に Knowles 説の概略を紹介し、⁽³⁾ 本節の補足としたい。

(1) 八六個条の調査命令書

Knowles によれば、訪問事項が女子だけに適用できる部分と、修道士 (Monks) と同様に聖堂参事会員 (Regular Canons) にも同じく容易に適用できる用語を用いているという、いわば「乗合馬車」であるという点を除いては、数世紀以来、教区長 (Ordinaries) たちによって用いられて来たものとまずほとんど異ならない訪問書である。というのは、院長および院長の管理を扱っている多くの部分を含んでおり、宗教生活の諸義務全般に及んでいて、そこには性的落ち度に関する何らの強調もなく、実際に雇用された調査委員らのやり方を激励した形跡もまたないのである。それは、一主教 (Bishop) の手中にあった文書と同一の効果のあるものであるということが立証される。⁽⁴⁾

(四) ≪二五指令≫

⑤ ≪二五指令≫が通俗的ないわば「ニュー・ルック」を有していたことはすでに述べた。しかし、それが十六世紀のイングランド社会との関連においてとらえられるとき、解釈上の微妙な相違がみられるのである。順を追ってみていくと、

指令「一」は、最近応じた継承法(Act of Succession)⁽⁷⁾と首長令(国王至上法: Act of Supremacy)⁽⁸⁾の二宣誓を修道院長と共同体に想起させ、確認させたものにすぎない。

「二」は、修道者らのあるべき位置を十分明瞭に知らせたものであるが、しかしそれは、修道者らがすでに甘受していた宣誓の論理的帰結でしかなかった。

「四」は、一般戒律(General Law)として、それが現在でもそうであるように、常に全修道会内における伝統的なものとなっている。けれどもこれは、本質的に二つの意味で両義にとれるのである。すなわちその一つは、

① あらゆる事情のもとにすべてのものを拘束する取締り。

② 単に、不可欠のもの(Necessity)・慣例(Custom)であり、特免によって認可される例外を許す一般的な原則。

またさらにもう一つは、

① 修道士(Monk)という言葉は、管理すべき財産(Estates)を所有し、合法的に任命された修道院の管理役員(Obedientiares)⁽⁹⁾を含み、大修道院長(Abbot)自身をも含む。

② 修道士という言葉は、修道院の「歩廊の修道士たち」(monks of the cloister)および公私の業務(Official Work)

ヘンリー八世の「小」修道院解散について(工藤)

に従事していなかった際の者たちに対する一般的な原則を単に表明したもの。

もし、後者②の意味にとれば、それは伝統的なものである。またもし、前者①の意味だとすれば、それは管理上の危機を生じさせただけでなく、實際上、修道院から自治を奪ったであろう。もし、高位にある上位者が特免の付与者としてすべての点で大修道院長の立場をとることになっていなかったならば、ある事情のもとに、大修道院長が修道士たちか自分自身かに境内を出る許可を与えることができなかった修道院は、実際問題として、全く運転不能なものとなっていたに相違ない。¹⁰⁾

これについて Knowles は、テューダー王朝の修道院——もしくは中世の最も厳格な規律の修道院ですらも——と完全に密閉された女子修道院との双方のあいだの類似は、合理的に引き出され得ないとし、「それゆえに、この指令の立案者が革新的な刷新の意向をもちあわせていなかったことは、推定的に言えば、ありそうに思われる。彼がそう意図していたならば、修道士という語の前に大修道院長ないしマスターを挿入していたであろう」

(It would therefore seem antecedently probable that the framer of this injunction had no intention of revolutionary innovation; had he so intended, he would have inserted 'abbot' or 'master' before the word 'monk')⁽¹¹⁾と説明する。

「五」については、類似の禁止が女子修道院内の男子にもおそらく適用されたと想像される。これも目新しさがなく、本質的に最も健全なものであるが、再びこの言い回しも両義にとれるので

ある。すなわち、

①それは、常に到る所で (*semper et ubique*) 拘束力がある。
 ②著名な貴婦人 (Ladies) や近親関係者の如く、大修道院長の食事室 (Abbot's Board) や賓客の大食堂 (Guests' Dining-hall) から締め出されるのは伝統的な例外。

再びここには、その背後に伝統を伴った法律上の注釈、つまり、より広義での解釈を好都合にしている。

一方、有名な十六世紀のイングランドにおける「新学問」(New Learning) の直接的帰結と考えられる条項が、次に挙げる諸条項である。⁽¹²⁾

指令「一六」。疑いなくこの時までには、St. Paul に関するコメント (John Cole: 1467?-1519) 風の新約聖書評釈が意図されていた。言葉だけは二世紀以上にも及んでいたようである。⁽¹³⁾

「一八」は、諸儀式の無益性をエラスムス (Erasmus: 1466?-1536) 流に記した長文であるが、この指令の内容については説明済みなので省略する。⁽¹⁴⁾

「二〇」は、むしろ指令「一八」以上に革命的な指令といつてよく、これは、一つの命令といえるものである。Knowles はいう、「これは、実際問題として、総代理 (トマス・クロムウェルをさす) 訳者註) の下に全権を保持した巡察者らによって適及力を有するものとされたのであり、それゆえ、修道誓願を免ずる権利を主張するものができた」(This, in practice, was made retrospective by the visitors who held plenary powers under the vicar-general, and could therefore claim the right to

dispense from monastic vows) と。この条項もエラスムスの教えに基づくものである。⁽¹⁵⁾

「二三」は、「古くからの迷信を否定し、聖遺物は「利益増大 (increase of lucre) の目的で」示されないと規定した点を注目すべきである。

「二五」では、毎日ミサの際にアン女王 (1533-1536) を思い起こさせるように聖職者 (Priests) たちに義務づけている。この条項は、それほど重大ではないとしても、しかしある意味では重要な命令といえよう。なぜかといえば、これは、イギリス国教会の新組織を明瞭に反映したものと解されるからである。

最後に「二六」では、大修道院長は、指令の侵害者を通告する者に対し、金銭および本署への道のりのあらゆる便宜とを供給するように仕向けられているが、これは「全く先例のない」(entirely without precedent) 条項である。⁽¹⁶⁾

さて、われわれの仕事は、単に「二五指令」が、⁽¹⁷⁾ シャープではあるが実際のな規律上の規準として意図されたものか、あるいは、⁽¹⁸⁾ 修道士たちにとって「不可能への復帰」(reductio ad impossibile) として意図されたものかどうかというのを再検討するだけにすぎない。そこで、そのことについて、指令「四」に限って述べるならば、Knowles は、文字通りに解釈するのは実際的にも精神的にも理解の重大なる失敗 (a serious failure) とし、「そのような取締りは、聖ベネディクトの時代からクロムウェルの時代に至るまで、修道院または教会の秩序における戒律ないし常習的行為では決まらなかった……」(Such a regulation had

never been the law or practice in the monastic or canonical order from the days of St. Benedict to those of Cromwell,...) のであり、「外部から課される取締りは、それらが道理に従って実際のであるときにのみ賢明なものとなるにすぎないのであって、これはそうではなかった」(Regulations imposed from without are only wise when they are reasonably practical, which this was not.) とする。そして、「精神的な更生は、一連の厳格な宗規によってなし遂げられるものでもなく、また、リーやレイトンのような者たちの尽力によるものでもない」と。

そこで Knowles は Gasquet 説を支持できないとし、その理由として続けて次のようないくつかの点を挙げている。

(I) Layton は、⁽²⁰⁾ のような政策を少しも知らなかった。彼は巡回活動の初めの数週間のあいだ、指令適用の制止を強く唱えたのであり、修道士らに惜しげもなく特免を与えた。⁽²²⁾

(II) Ap Rice によって十月三十日⁽²³⁾ Denney 女子修道院 (Cambridgeshire の Franciscan nuns) でなされた提案 (I. e. 'they will all do this if they are compelled to observe these injunctions.')

⁽²⁵⁾ は「重要な議論とはなり得ない。なぜならば、この提案は明らかに、やめたいと思う修道女全員に特免を与えて免職させるという Legn の意向を妨げたい」という望みを懷いて、クロムウェルへ宛てられた Legn の書簡の中に追伸としてほめかされたものだったからである。⁽²⁶⁾

(III) 実際、⁽²⁷⁾ 二五指令⁽²⁸⁾ が、一五三五年に修道院をからにしたかあるいは修道院がそうされるように企図されたのかは、何の証

ヘンリー八世の「小」修道院解散について (工藤)

拠もない。⁽²⁷⁾

このことについて Knowles は「とくに次のような興味深い判断をくだしている。すなわち、

そこにはほとんど証拠がないというのは、指令の苛酷さが王によったということを示すことになるのであり、王は常に他の人々の責務を厳しく見たが、しかし王はすぐにそのことに興味を失い、クロムウェルがふさわしいと考えたように、一部分は大修道院長らを滞りなく屈從的なものとしておくために、また一部分はもうかる特免の利益を確保するために、指令の適用を彼に任せた (What little evidence there is goes to show that the severity of the injunctions was due to the king, who always took a strict view of other people's obligations, but who quickly lost interest in the matter and left it to Cromwell to apply the injunctions as he thought fit, partly to keep the abbots duly subservient and partly to secure the advantages of a lucrative dispensation. 傍点(は)訳者)。⁽²⁹⁾

また、⁽³⁰⁾ 八六個条の調査命令書⁽³¹⁾ については、(IV) 巡察者たちは「八六個条の調査命令書」を携えて歩いたのではあるが、巡察者たちがそれをあらゆる場合に用いたとか、あるいは、実は、何らかの場合に用いたという証拠はないのであり、また宗教上および教会法上のプロローグが、おそらくまるで無視されたという証拠もない。⁽³²⁾

以上のことからいえることは、⁽³³⁾ 二五指令⁽³⁴⁾ が不可能への復帰として「意図されたものではない」ということ、単にそのことだ

けである。他はとりわけてなしたる見解上の問題はないと思われる。今八六個条の調査命令書^⑥がどのように修道院の巡察に利用されたかという点についても全く同様のことがいえるであらう。

註

- (1) D. Wilkins, *Concilia Magnae Britanniae et Hiberniae*, 4 vols., London, 1737. Vol. III, p. 786 以下に条項が掲載されている。
- (2) Francis Aidan Gasquet, Henry VIII. and the English Monasteries: An attempt to illustrate the History of their Suppression, 2 vols., Vol. I, John Hodges, London, 1838 (second edition). pp. 244-284.
- (3) Dom David Knowles, The Religious Orders in England, 3 vols., Vol. III: The Tudor Age, Cambridge U. P., 1971. chapter xxii.
- (4) Ibid., pp. 274-275. 傍点は引用者。
- (5) 「*ロイヤル・國王至上権 (Royal Supremacy)*」それは既決事項 (*chose jugée*) だったが、はるておき、聖ルイ (St. Louis) が発布しなかつたかも知れず、またイノセント三世 (Innocent III) が是認しなかつたかも知れない何物かを、クロムウェルの指令の中に見出すことはむずかしい (G. G. Coulton, *Five Centuries of Religion*, vol. IV, Cambridge, U. P., 1950. p. 661, quoted by D. Knowles, op. cit., p. 275, note 1.)。
- (6) 26 Henry VIII, c. 2: Stat. Realm, III, 492.
また「*完全の神聖とてついで*」25 Henry VIII, c. 22: Stat. Realm, III, 471. Cf. C. H. Williams (ed.), *English Historical Documents 1485-1558*, Eyre & Spottiswoode, London, 1971. pp. 447-452.
- (7) 26 Henry VIII, c. 1: Stat. Realm, III, 492. Cf. C. H. Williams (ed.), *English Historical Documents 1485-1558*, pp. 745-746.
- (8) 第一回巡察 (一五三四年秋—一五三五年) の際に「すべての修道士や修道女らは誓いをたてさせられたのであり、誓いをたてさせるのに何らかの困難さを見出した人々というのは、自分たちの宗規を遵守することに最も実直な人々であった。つまり、カルトシオ修道会 (Carthusian)・ブリギッタ修道会 (Bridgettines)・フランシスコ派厳修会 (Observant Franciscans) に所属するメンバーだけで、この者らは修道院人口のうちのはんの小部分を構成したにすぎない (G. W. O. Woodward, *Reformation and Resurgence 1485-1603: England in the Sixteenth Century*, Blandford Press, London, 1963. pp. 75, 76.)」。
- (9) 大修道院長は「修道院制度 (Monasticism) のまろしくその起源から、常にこの点でリーズナブルな自由をエンジョイしていたのではなかったか?」
- (10) D. Knowles, op. cit., Vol. III, pp. 275-276.
- (11) Ibid., p. 276.
- (12) 「新学問」は「おのずからいくらかの大修道院長たちのあいだに浸透しており、ちやうにより若い修道士たちのあいだにまで影響を及ぼしつつあった。ラティマー (Latimer) の如き主教らによって紹介された新しい「講演者」 (Lecturers) は「混乱に加わってしまっていた (Maurice Powicke, *The Reformation in England*, Oxford U. P., 1967. pp. 32-33.)」。
- (13) これはほとんど神徳 (divinity) に関する講義の発展に

上のものではなかった。また、聖書の強調は時代の動向だったことはいうまでもない。

- (14) 『法政史学』第二十七号 七一―七二頁参照。また指令「一八」に関して Knowles は「上の長い条項が控えめに言い表わされ、修練長 (Novice-Master) によって当然与えられるべき諸留保を伴って非公式に伝えられたならば、神学上非の打ちどころのないものとなっていただろう」(D. Knowles, op. cit., Vol. III, p. 276.) と述べている。

- (15) D. Knowles, op. cit., Vol. III, p. 277.

実際に「巡察者たちは、王の総代理の權威で二十四歳以下のすべての修道者を免職し、巡察が進行するにつれて新たに請願を行なった者たちをもその修道誓願より免除したのである (Ibid., p. 279.)」。

- (16) 条項「二六」の中に「生活必需品」とある訳語を「途中必要な物」に訂正する。

- (17) D. Knowles, The Religious Orders in England, 3 vols., Vol. III: The Tudor Age, Cambridge U. P., 1971. chapter xxii.

- (18) F. A. Gasquet, Henry VIII. and the English Monasteries: An attempt to illustrate the History of their Suppression, 2 vols., Vol. I, John Hodges, London, 1888 (second edition). chapter vii.

- (19) D. Knowles, op. cit., Vol. III, p. 277.
大修道院長や修道院の管理役員による自由の濫用が疑いなく数世紀におよぶ墮落とスキヤンダル（主）な原因であった……そして「いずれにしろそれは「ヨーロッパ」にあまねく幾世紀にも亘って使用されたことによりあたりま

ヘンリー八世の「小」修道院解散について (工藤)

えのこととなり、公認された要求権を有していたのである。地方におけるカルトジオ修道会士ですらも境内の外へ歩いて行くことが折にふれて許された (Ibid.)」。

- (20) Ibid., p. 278.

- (21) 結局「大修道院長や小修道院長たちからの夥しい請願は……クロムウェルによって好意をもって受理されたようである。クロムウェルは、あらゆる立場を如何にしてベストにするかを知っていたのであって、大修道院長たちは自由のために代金を支払わなければならなかったが、しかしそのような特免は、たとえ指令が初期の規律への復帰としてもともと意図されたとしても、ほとんどロジカルではないだろう (Ibid.)」。

- (22) Cf. Ibid., p. 281.

- (23) 巡察が開始されてから三カ月たった。

- (24) F. A. Gasquet, op. cit., Vol. II, Appendix V, p. 550.

- (25) D. Knowles, op. cit., Vol. III, p. 285.

Gasquet は「この提案の意味を、指令を文字通りに適用することによってスキヤンダルなしで修道院の取り片付けが果たされる」というふうに Ap Rice が意図したものと解釈したようである。したがって「Ap Rice がクロムウェルの deepest designs を実行しようとする腹心のエージェントだ」という Gasquet の提唱は「これに基づいて」。

- (26) Ap Rice の追伸は「H. Ellis, Original Letters (three series, II vols.), No. III, London, 1824-46. ccxiv. Cf. Letters & Papers of Henry VIII, 22 vols., Vol. IX, No. 708.

- (27) 宗規に従うかあるいはやめるかという二者択一は「ほぼ

三年後の一五三八年に托鉢修道会に申し出られ、望み通りの結果をなし遂げたが、しかし、三年さかのぼる議論は、変転きわまりないその頃にあつて、ほとんど力がない (D. Knowles, op. cit., Vol. II, p. 278.)。

(28) D. Knowles, op. cit., Vol. III, p. 278.

(29) この点 Baskerville は「国王の巡察者たちは徹底的に主教の巡察者たちの先例にならつた」(The royal visitors followed the precedents of episcopal visitors down to the last detail.) とすら陳述している。Geoffrey Baskerville, English Monks and the Suppression of the Monasteries; The Bedford Historical Series: VII, Jonathan Cape, London, 1972, p. 132. なお、司教(いうまでもなく、この場合は主教とするわけにはいかなう)による巡察の際の訴訟手続きについては、Cf. D. Knowles, Religious Orders in England, Vol. I, Cambridge U. P., 1948, pp. 81-83.

ところで、△二五指令△に関するかぎりでは、個々のケースに直面すべく巡察の終了後に案出され、数週間ないし数カ月のインタルをおいて、それぞれの修道院に向けて発布されたのではなくて、おそらく、印刷されたブロードシートで巡察者たちに持ち歩かれたのであり、巡察者が調査を終えて修道院を去るまえに、つまり、多分巡察者の修道院到着後はんの数時間後に共同体に突きつけられたのであり、そしてそれは、全部同一のものであつたと考えられる (D. Knowles, op. cit., Vol. III, p. 279.)。この点だけは主教による巡察とは異なつていたようである。

三、視察者とその性格

総代理 (Vicar-General) および国王代理 (Vicegerent) として聖職者会議 (Convocation) の会長に就任し、カンタベリー大主教の上位を占めたクロムウェルは、一五三五年一月、すでに万事巡察の機構を整えていたが、しかし何らかの事情により、そのブレイキがとかれるまでには七カ月を要した。⁽¹⁾ 前回の巡察調査は、修道院抑圧の風評と新たな課税の風評を招き、先見の明ある修道院長はすでに事前対策を施していたこともあつて、事態は緊急を要し、クロムウェルはレイトン博士にせかされながらも、⁽²⁾ 「具合の悪いところを矯正するという公然と認められる意向で」⁽³⁾ (with the avowed intention of remedying what was amiss) 第三回目の修道院巡察を開始するのである。

クロムウェルによつて任命された視察者たちは、主教区裁判所 (Consistory Courts) で働いた経験がある法律家が多かつた。もっと具体的にいうならば、宗規に通じた教職者 (Canonicists) か民法学者 (Civilians)、もしくはコモン・ロー法律家 (Common Lawyers) のいずれかに属しており、さらに聖職者 (Priests) と俗人 (Laymen) の二つの身分に分けて考えるならば、両者の人数はそれぞれおよそ五十名ずつの合計約一〇〇名の人々から構成されて⁽⁴⁾いた。したがつて、これらの視察者は、いつでも起訴に対して弁護人として振舞う資格を十分に与えられ、かつその摘要書に従つて評決を得るために必要なあらゆる術策を講じるのに熟練した者たちであつた。⁽⁵⁾ 俗人 John Tregonwell や John Ap Rice

表 [I]

	Richard Layton	Thomas Legh	John Ap Rice	John London
身分	聖職者 (Priest)	俗人 (Layman)	俗人	聖職者
視察時年齢	約 38 歳	35 歳 未 満	?	約 50 歳
性 格	多 弁 (garrulous)	尊 大 (arrogant)	鋭敏・批判的 (shrewd, critical)	従 順 (pliable)
共 通 点	宗教生活 (religious life) をなんら称賛しない			
視 察 後 の 動 向	すぐれた官職に就き優遇される また、解散修道院領を取得する をおくなど、富裕の生涯			Fleet 監獄で 悲惨な獄死

のような幾人かの例外を除けば、修道司祭 (Regulars) に対する教区付司祭 (Sec. Ears) の昔からの憎しみを十分に分けもつことで染められた出世第一主義者としての教区付司祭だったのであり、それゆえに修道士らはこれらの視察者の中に最も恐るべき敵手を見出したのである。ある者はなぜ自分が任じられたのかを全く理解し、クロムウェルに次のように書簡を送っている。すなわち、「改革にふさわしい多くのことを御覧に入れましよう、それについて、きつと殿下と貴官はお喜びになられましよう」(You shall hear and see many things worthy of reformation, whereof, I suppose, the King's Highness and you will be

glad.)⁽⁸⁾と。

また、視察者の性格について Pollard は、「視察者たち自身は疑わしい性格の者たちだった。実際に、尊敬すべき人物はほとんど仕事をするように説得されなかった」(The visitors themselves were men of doubtful character; indeed, respectable men could hardly have been persuaded to do the work.)⁽⁹⁾と述べているが、果たして Pollard のこの見解は、そのまま信用に値するかどうかというならば、いささか疑問がもたれる。

そこで、次にこの点について説明していきたいと思うが、略表「I」に表示したように、これらの視察者のうちでようやくその行動の足取りを追跡できるのが次に述べる代表的な四名の者であり、他はほとんどトレースできないので、まずこの四名の者を中心にみていきたい。

(i) リチャード・レイトン博士 (Dr. Richard Layton)

当節では「交際じょうず」⁽¹⁰⁾ (a good mixer) と称されたレイトン博士は、Smith によれば「心からの俗物」⁽¹¹⁾ (a hearty vulgarian) であり、Baskerville によれば「男性的な男」⁽¹²⁾ (man's man; 'heman') のあのいまわしいタイプ、換言すれば、「例の胸の悪くなるようなタイプの第一番の見本」⁽¹³⁾ (a prime specimen of that loathsome type) とされ、明らかにダーティー・ス્ટーリーの類を話したり聞いたりすることを愛した口数の多い牧師 (Clergyman) だった。それゆえ、修道士たちに指令を課するに幾分だらしなかったということが証明されるのである。⁽¹⁴⁾
また、レイトンが信念の面においても欠乏がみられたというこ

とは、クロムウェルが「失敗」(*faux pas*)をほのめかしたとき⁽¹⁶⁾に、Glastonbury 大修道院 (Somerset の Benedictine monks) の院長 Richard Whiting (？-1539) に懐いていた誠実でかつ好意的な意見を急遽変えたという事実と、同様に、かつてイエスがベタニヤ (Bethany) で得た以上の歓迎⁽¹⁷⁾でレイトンが総代理を賓客として Harrow に招待したときの言葉 (*L. e. Simeon was never so glade to se Chryst his master, as I shabe to se your Lordeshippe in this your owne house, and all that ever shabe in hit for my lyffe.*)⁽¹⁸⁾によってもまた明白であろう。

表「II-1」は、レイトンの公職上および聖職上の着実な昇進経過を簡潔に示したものであるが、とくに一五三〇年代の昇進ぶりには十分留意すべきものがあるといえる。つまり、わけでも一五三五年七月に開始された修道院の巡察はレイトンにとつて繁栄への手っ取り早い手段だったのであり、当局者たちはそのことを知っていて、彼の強請・窃盗・汚職を見て見ぬふりをしたという⁽¹⁹⁾。修道士も人間であるならば獣とたいしてかわらないだろうと期待しながら、修道士らの怪しい挙動についてすっかり知らせてくれる気の合った旧友を Yorkshire にたくさんもっている⁽²⁰⁾、とレイトンは予めクロムウェルに告げている。

巡察途上、クロムウェルに宛てられたレイトンの書簡における内容上の特徴は、①きびきびした言い回しで絶え間ない活気があり、クロムウェルの膨大な信書の中にあつて目立つ、また、②大臣の重苦しくかつしばしば悲惨なまでに無味乾燥な郵便物のただ中であつて歓迎されようとする、際立ちを与えることをほとんど怠

っていない、この二つのことがいえるであろう。すなわち、事実、これらのフリーズの多くはおよそ全部が名誉を傷つけるようなものばかりであり、如何なる免罪符をもつてしてもレイトンの品性を救済するには及ばないのではないかとすら思えるほどである⁽²¹⁾。したがって、われわれは、それらの中に真相の正確な割合を知ることが不可能というべきであろう。なんとすれば、レイトンの書状はいわばお世辞に満ちたところが全くないとはいえず⁽²²⁾、さらに、(1)それらが遺物となるだろうということを全然考えずにしたためられたものであり、(2)あるエピソードの最もヴィヴィッドな叙述がまた最も信頼に値すると誰しも考えがちであるが、そういった何かしらの仮定を全くせずに書かれたものに他ならないからである⁽²³⁾。

ゆえに、修道者らに関する不謹慎な話のほとんど全部が正当であるというのは、レイトンに帰せられる、といわれても仕方がないのであるが、しかし一方、レイトンが修道者らについて言ったことは、例えば Warden シートー派大修道院 (Bedfordshire; Warden と書く⁽²⁴⁾) の院長がちょうどこのときに管理下の修道士たちについて言っていたことと大体同じであつて、何も悪くなかった⁽²⁵⁾。とくに Durham 司教座聖堂付属修道院 (Benedictine monks) では、「婦人方は誰も来ませんし、修道士たちは誰も外出しません」(*No women come in and no monks go out.*)⁽²⁷⁾と好意的な報告をしている。レイトンは宗教的建造物に指令を遵守するように強要することにかけては同僚のリー博士よりも遙かに厳格ではなかったし、また確かにオックスフォード大学を彼が

改革した——その仕事を、ケンブリッジ・マンとしてのレイトンが、徹底的にエンジョイしたに違いなかった(表「II-1」一五三—三六六の項を参照)——以上に見事であり得るものは何もなかった、ともいえるのである。

いずれにしろ、レイトンが向う見ずにしかも大規模に修道院共同体の罪状を告発したという事実は覆すことのできない真実であり、そしてその証拠が支持されない、あるいは成り立たないという代表的な人物なのである。

表 「II-1」

Dr. Richard Layton

歴 略 び よ お 業 職

- ケンブリッジ大学民法学博士(D. C. L. of Cambridge University)
- Cumberland の名門に生まれる
- Cunbert Tunstall (1474-1559) と親戚
- 恩寵の巡礼(Pilgrimage of Grace, 1536-37) の指導者となった Robert Aske (?-1537) と親戚
- 一五二二年(多分、二十五歳になろうとしていた)、ケンブリッジ大学民法学士(B.C.L.) の学位を修得。
- 昇進のはしごをのぼりはじめる
- 一五二〇年代末、ウルジイ(Thomas Walsey: 1475?-1530) の奉職中にクロムウェルの同僚。クロムウェルとの最初の接触
- ? 年、カンタベリー大主教管轄下の控訴裁判所(Court of Arches) 弁護士(弁護士職は以前より確立)

ヘンリー八世の「小」修道院解散について(工藤)

- 一五三三年、⁽¹⁾ Syon の修道女の裁判を審理
- 一五三四年までにはその他多くの聖職禄(Benefices) や閑職(Sinecures) を有す
- 一五三五年以前に Buckingham の助祭長(Arch-deacon) となる
- 一五三五年、大法官府(Chancery) の書記に就任
- 同年、フィッシャー(John Fisher: 1459-1535) およびモア(Thomas More: 1478-1535) の裁判を審理
- 一五三五—三六六、国王の視察者として成功。オックスフォードの巡察において中心的役割を果たす。オックスフォード大学の写本と図書館の最初の破壊者となる
- 一五三六年、Anne Boleyn (1507-1536) の裁判に関与
- 一五三六—三七年、恩寵の巡礼の指導者らの裁判に関与。また、Glastonbury 大修道院の最後の院長の裁判では舞台裏で一役を担う⁽¹⁾
- 一五三七年、牧師館 Harrow-on-the-Hill を所有し、同教区牧師(Rector) となる
- 一五三八年、枢密院(Privy Council) の書記・大法官府主事に就任
- 一五三九年、大修道院財産の明渡しを交渉する委員となる

- 一五三九—四三年、York の首席司祭(Dean) に就任
- 一五四〇年、Anne of Cleves (1515-1557) を離婚する方法の案出に参加
- 一五四三年、Netherland 駐在大使に就任。一方では

Stepney の教区牧師・Chesterle-Street の大聖堂 (Collegiate Church) の首席司祭・Sedgefield の教区牧師その他を兼職・歴任す
○一五四四年六月、Brussels において死す

表
〔II-2〕

Dr. Thomas Legh

- ケンブリッジ大学民法学博士・Layton の同僚
○Cumberland にくいつかのコネクションをもつ Cheshire 生まれ
○Rowland Lee (Coventry および Lichfield の主教：?-1543) と遠縁のふと
○一五二七年、ケンブリッジ大学 (多分 King's College の) 民法学士 (B. C. L.) の学位を修得
○一五三一年、同民法学博士 (D. C. L.) の学位を修得
○? 年、カンタベリー大主教管轄下の控訴裁判所弁護士となる
○一五三一―三四年、Denmark 駐在大使に就任
〔国内外において種々様々な方法で雇用される〕
○一五三三年、Catherine of Aragon (1485-1536) の離婚裁判で Dunstable 小修道院を分担
○一五三五―三六年、国王の視察者として修道院を巡察。主にケンブリッジを巡察す
○一五三六年、Anne Boleyn の裁判で同じく Dunstable

- 小修道院を分担
○同年、Layton とともに、裁判に先立って恩寵の巡礼の首謀者を調査す
○一五三七―年、大法官府主事に就任
○一五三八―四〇年、大修道院の抑圧に任用される
○一五四四年、ナイト爵に叙せらる
○一五四五年、死す

表
〔II-3〕

Dr. John Ap Rice

- 古典学者 (Scholar)・歴史家 (文学史)
○四法学院 (Inns of Court) で挙げられ、クロムウェルの個人的なスタッフ・公証人 (Notary Public) となり、以後ながく重大な裁判に従事
○一五三二年までにはクロムウェルに服務す
○同年、Auckland の C. Tunstall の家を家宅搜索
○一五三四年までには Salisbury の記録事務官に就任
○同年、カルトジオ修道会の修道士すなわちフィッシャーおよびモアを審理
○一五三五―三六年、国王の視察者。他にウェールズの行政をイングランドの行政に同化させるための法令を起草するのに重要な役目を勤める。すなわち、Carmarthen および Brecon の小修道院を獲得するために働く

- 〇一五四七年、ナイト爵に叙せらる
 〇一五一年、ウェールズ辺境評議会 (Council of the Marches) に関係す
 〇一五七三年^(五)(?)、死亡

表 [11-4]

Dr. John London

- 〇一四八六年(?)生まれ。Winchester およびオックスフォード大学 (New College) で教育を受く。オックスフォード大学民法学博士
 〇一五〇五—一八年、New College の特別研究員
 〇一五一年、オックスフォード大学民法学博士の学位を修得。York の受禄聖職者 (Prebendary) となる
 〇一五二年、Lincoln 大聖堂の会計係 (Treasurer) に就任
 〇一五二六年、New College 学長 (Warden) に就任
 〇一五三四—三六年、同じく New College 学長
 〇一五三年、Wallingford の首席司祭
 〇一五三五—三八年、国王の視察者。巡察には最初からではなく途中より参加し、巡察終了まぎわにはかなり活発に活動す
 〇一五三九年、六箇条法 (Statutes of Six Articles) の実施に熱意を示す
 〇一五四〇年、クロムウェルの失脚 (処刑) と同時に

Stephen Gardiner (1483?-1555) 側に奔り、ルター派信者 (Lutherans) を公然と弾圧
 〇一五四三年、ウインザーの異端を起訴
 〇同年、ウインザーの異端起訴とはほぼ同じ時期に他のある異端起訴の中づらんに (Thomas Cranmer: 1489-1556) をもこの起訴に含めようとの陰謀を積極的に企てて失敗し、破滅。偽誓罪一度と二度の姦通罪に問われて有罪の判決を受け、Fleet 監獄に投獄。獄死

註

- (一) Middlesex & Bridgetones.
 (二) Somersetshire & Benedictines.
 (三) 以下 Hughes は 1533 年 - 1534 年 5 年間のこと (P. Hughes, op. cit., p. 284).
 (四) Bedfordshire & Austin Canons.
 (五) Knowles は 1484 年 - 1485 年 1 月 1 日のこと (D. Knowles, op. cit., p. 273, note 1.) 今のところ、敢て言いたくない。以下に引くのは大抵は誤りである。

※ なお、表 [11-1] ~ [11-4] は、以下の文献を比較参照して作成した。

P. Hughes, The Reformation in England, Vol. I: The King's Proceedings, Hollis & Carter, London, 1966; H. Maynard Smith, Henry VIII and the Reformation, Macmillan, London, 1964; A. G. Dickens, Thomas Cromwell and the English Reformation, English U. P., London, 1972; Do., The English Reformation, Schocken Books, New York, 1969; D. Knowles, The Religious Orders in England, Vol. III: The Tudor Age, Cambridge U. P., 1971; Geoffrey Baskerville, English Monks and the Suppression of the Monasteries: The Bedford Historical Series: VII, Jonathan Cape, London, 1972; F. A. Gasquet, Henry VIII, and the English Monasteries: An attempt to illustrate the History of their Suppression, Vol. II, John Hodges, London, 1889.

(ロ) トマス・リー博士 (Dr. Thomas Legh, or Leigh, Lee) 如才がななく、⁽²⁹⁾ ぼれの強いヤング・ドン、そして「大層大きくてぶでぶの体質」(a very bulky and gross habit of body) 、『そのような人物がトマス・リー博士で巡察者たちのナンバー・ツーにかぞえられている。その堪え難い傲慢さに加えて同僚のひとりアブ・ライス博士が「太守面」(satrapic countenance) と呼んだいわゆる古代ペルシアのサトラップに似た容貌は、すべての人々に——彼のいとこで Lichfield の主教 Lee にさえも——無礼の原因となった。⁽³⁰⁾ すなわち、ユーモアのない横柄な男で冷たいほうだがレイトンよりは鋭敏な心の持ち主であり、無情な人物であったためにノーフォーク公 (Thomas Howard: 1473-1554) や Chapuys (駐英 imperial ambassador) にも嫌われたところ。』⁽³¹⁾

ところで、注目すべきことは、アメリカの言葉でいう "icks and hayseeds" (田舎者や田舎作) とか、また別の言葉では、「野蛮な田舎者」(barbarous rural persons) というふうに知られていたこれらのエリートたちを、リー博士の如きタイプのインテリ連中が刺激するところの恐怖にまわるものはない、という Baskerville の指摘である。⁽³²⁾ 表「II-2」に示したように、レイントンとともにリーは、いわゆる恩寵の巡礼 (Pilgrimage of Grace, 1536-37) をひき起こした暴徒とともに「⁽³³⁾ まやしく猪の類 (bête noire) となった。

リーは、仕着せを着せた随行員に随行されてビロードのガウンを着て現われたとき、修道士たちに大修道院の西門で行列をつくって出迎えられることを期待し、⁽³³⁾ 持ち前の傲慢な態度で修道士ら

の罪状をあばく仕事に着手したのであり、あげくの果ては修道士を脅かして互いに告発させるという方法を採用した。そして、それがうまく成功しなかった場合には修道士どもが知られるべきはずであった真実を妨げるために「共謀」したと報告したのである。⁽³⁴⁾ さらにリーは、法律の字句にこだわる法律尊重主義者であった。このゆえに、悪く偏狹な人物とも解釈されているのであるが、リーはわずかの斟酌もなく指令の遵守を修道士らに強要しただけでなく、あまりにも寛大過ぎるという理由から、⁽³⁵⁾ レイトン博士をトラブルにおとしめるようにも試みているのである。リーはもちろん、任務中にひとかどの財産をつくったのであり、その行ないについての苦情は多いものがあつた。⁽³⁶⁾ 実に、「このように通常の業務を行なうためには永続的な特免が必要であることを余儀なくさせ、それゆえに、修道院長や臣民が万能の総代理を永続的に思い起こし続けることを余儀なくさせるように俄に修道院の規律を遵守不可能なものへと引き締める計画を案出したのは、リーだった」(It was Legh who devised the plan suddenly to tighten the monastic discipline to an impossibility of observance, thus forcing a continual need of dispensations for the ordinary conduct of affairs, and so a continual recurrence of superiors and subjects to the all-powerful vicar-general.) ⁽³⁷⁾ ことを考えてみるならば、リーはこの方面における相当の実力者であったと想像され、そしてまた、この特免を修道院長たちに付与することによる政府の収入こそが、当面は何よりも望まれたのであろう。

しかしながら、反面、リー博士はその廉直さゆえに大法官

Thomas Audeley (1488-1544) がクロムウェルに告げたような世評 (*I.e. 'I hear not but that he with himself right indifferently in the execution of his charge.'*)⁽³⁸⁾ を保持していたようにも思われ、さらにまたリーは、著名な修道士のために十分な年金を保証するようにも骨を折っていたのである。例えば、Norfolk の Cokesford 小修道院 (Austin Canons)⁽³⁹⁾ の院長がクロムウェルに宛てた書簡の中で述べた言葉 (*I.e. 'in him is all my trust.'*)⁽⁴⁰⁾ や、また同様に Hampshire の Wherwell (Benedictine nuns)⁽⁴¹⁾ 女子大修道院長が述べた言葉 (*I.e. 'Dr. Lee's learning and excellent qualities may profit us and our monastery.'*)⁽⁴²⁾ によってもそのことが窺知され、一概にリーを冷酷な修道院の破壊者とみなすわけにはいかないのである。

(c) ジョン・アブ・ライス博士 (Dr. John Ap Rice, or Price) アブ・ライス博士は、「リー博士の柔和版」⁽⁴³⁾ (a milder edition of Dr. Legh) とされており、同僚の Dr. Ellis Price と混同されてはならない。Ellis Price の巡察はウエルズ内だけに及んだのであり、一緒に夫人を連れ歩いたことで不適当な代理者として知られるが、確かに改革者としてはまず賢明な行為だったとはいえないように思われる。

アブ・ライスは、リアリストでしかも「修道者を毛嫌いした」⁽⁴⁴⁾ (prejudiced against the religious) 人物とされ、よりよい成果はなるべく多くの懐柔的な方法を採用することによって得られると考えた。そして「みずから「小さなずぶとろ」とりわけ告発におづ」⁽⁴⁵⁾ (small audacity, especially in accusation) とながら

Wiltshire の Lacock 女子大修道院 (Augustinian Canonesses) をライスが視察した際に、修道院とその居住者たちに大変手厚い賛辞を払ったのであり、また、その学識に関してご婦人方をはめているのである。⁽⁴⁶⁾ West Suffolk の Bury St. Edmunds 大修道院 (Benedictine monks)⁽⁴⁷⁾ では、St. Lawrence が焼かれたという木炭をライスは信じている。またライスは、明らかに前歴に臆病なところがあつたらしく、このためかどうかはわからないが、ライスに関しては表「II-3」を見てもわかるように、「生歿年をはじめとして、案外不明な点が多い」⁽⁴⁸⁾。

ライスは、巡察終了後は、解散修道院領をウエルズの Brecon に得てそこに腰を落ち着けて州の旧家の基礎を置き、見事な蔵書を収集してメアリー女王 (1553-1558) に鋳造貨幣 (Coinage) に関する著書を献呈する他にも、イングランド史およびウエルズ史関係の多くの堅実な著作を著わした。ライス一代で多くの有利な恩恵に浴したこともあってか、ライスの子孫である Colonel Price をしてひとりの著名な勤王家とまでなされている。

(二) ジョン・ロンドン博士 (Dr. John London) Hughes はロンドンをナンバー・フォーとして扱い、「このひどい時代において最もひどい男のうちのひとり」⁽⁴⁹⁾ だったとしている。すなわち、Matthew Parker はロンドンを「例の太った不潔な受祿僧」(that fat and filthy prebendary) だと言った。近代作家の枢機卿 Gasquet は「修道院の略奪者全員の中で最も恐るべき」⁽⁵⁰⁾ (the most terrible of all the monastic spoilers) 人物として陳述し、Dr. Hunt は「粗野で下劣」(coarse and

vile) な男として述べているということをその論拠として挙げているのである。

「巡察の期間中に、自己の機会を利用して修道女らに罪を犯すように懇願したことは責められる」(During the visitation it is charged that he used his opportunity to solicit the nuns to sin.)⁽⁵¹⁾——つまり、ロンドンには巡察期間中にある修道女姉妹と罪を犯したために、クロムウェルとのあいだにトラブルを起こしていたようであるが、表「II—4」を見てもわかるように、この事件はロンドンにとって、のちに運命を左右するほどの大きなマイナスとなった。

またロndonはイギリス国教会のいわば「中教会派」(central churchman)⁽⁵²⁾としての信仰上の立場を保っていた。その内実は、ドイツ新理論およびその実際上のあらゆる影響の強力な反対者であったということが、彼がオックスフォードで新教(Protestantism)⁽⁵³⁾の鎮圧活動を以前から行なっていたという事実からも推察され、なおその上、首長令にすらも反対であったようである。⁽⁵⁴⁾後年になって、反動の六箇条法を実施するのに同様の熱意を示すが、一方では迷信的な托鉢修道士を軽蔑し、偽りの聖遺物や信用をおとす記念碑の壊滅を享受したために古い意見をもつ人々からさえも怒りを招く。結局、プロテスタントとカトリックとの双方より悪い圧迫を被ることとなって、数年後にはウィンザーでの屈辱的な乗馬(Berkshireの主なマーケット・タウンを馬の尻に顔をあてがわされて連れ回された)という公的懺悔を強いられ一切の地位と名譽を失墜して Fleet 監獄に投獄され、そ

こで獄死した⁽⁵⁵⁾(一五四三年)。

ところで、「これらの話は、実際、一五三九年の六箇条法として知られる抵抗に屈しない保守的な規準の諸条項を彼が熱心に強要したために、その腹いせにホール⁽⁵⁶⁾の如き同時代の革新集団作家ないしはジョン・フォックスと彼の門下によつて流布されたのである」(These stories were, in fact, put about by contemporary writers of the innovating party like Hall, or by John Foxe and his followers, in revenge for the zeal with which he enforced the provisions of the dihard conservative measure known as the Act of the Six Articles of 1539.)⁽⁵⁷⁾ Baskerville は反論し、「彼は全体から見、親切な人物であつたし、今もこののちにもクロムウェルへ宛てた彼の書簡は、彼がその基本財産を没収するように権限を委任された者たちのために甚だ多くの同情を示している」(He was on the whole a kindly person and his letters to Cromwell both now and later show a great deal of sympathy for those whom he was commissioned to disendow.)⁽⁵⁸⁾と指摘している。

巡察者のひとり Thomas Bede は、「ロンドン博士は他の全部の視察者以上に無知と迷信の改革を行なつております」(Doctor London has done more for the reformation of ignorance and superstition than all the other visitors.)⁽⁵⁹⁾とクロムウェルに報告しているが、ロンドンが本物だとされたカインの頸骨をはじめ多くの聖遺物を信じなかったのは、確かにロンドンの名譽となっているのである。その従順な性格さのゆえに、ロndonは、国家

が浄罪界とか巡礼とかあるいは信仰療法などのイメージを鎮圧し始めつつあったとき、自分自身のなまぬるさを一掃せざるを得なかったのではなからうか。

(附) その他の主だった視察者

五、六番目に多く現われるのが Dr. Bedyll である。Bedyll は司祭であり、New College におけるロンドン博士の同僚で、一五三二年に枢密院の書記となり、一五三七年にロンドン市の助祭長に就任していたときに、早くも死亡している。

Bedyll は教養のある人物で危険な論争者・多元論者として知られ、ユーモアのセンスも少しもついていた。また、最も追従的な人物でもあり、Knowles によれば、Bedyll の書簡はほとんど例外なく虫が好かないものばかりだといふ。⁽⁵⁹⁾ しかし、Bedyll は Folkstone 小修道院 (Kent の Benedictine monks) および Dover の小修道院 (St. Martin's, Benedictine monks) か、⁽⁶¹⁾ それに Ramsey 大修道院 (Huntingdonshire の Benedictine monks) を好意的に報告しているのである。⁽⁶⁴⁾

Dr. John Tregonwell は、コーンウォール生まれの俗人で、一五三五年に海事裁判所 (Court of Admiralty) の主要な裁判官に就任し、メアリー女王統治下にパラメントのメンバーとして大層寵愛を得、⁽⁶⁵⁾ 一五五三年にはナイト爵に叙せられている。

Tregonwell は、欲張りでしかも新しい世の中に賛成しているのではあるが、視察者の中では他の影響を受けないいわゆる独立の精神をもつ第一人者で、立派な修道院とみなされる修道院の申し立てをためらいなく弁護しており、宗教面においては保守的な

思想の持ち主であった。アブ・ライスと同様に、ある修道院領を得て、一家のものを造っている。⁽⁶⁶⁾

他に、イングランド内の巡察者としては、Thomas Southwell や Dr. Petre, John Hilsey、それに、別途托鉢修道会の修道院を巡察した Richard Ingworth, Dover の属主教 (Suffragan Bishop) Dr. Edward Baskerville といった同修道会に従順な三名の托鉢修道士がいた。この三名の者のうち Edward Baskerville は、エリザベス治下 (1558-1603) で至上権の宣誓を拒絶したために、トラブルに落ち込んでいる。一方、ウェールズにおいては、前述の Ellis Price とともに John Vaughan の活躍が確認される。

さて、以上みてきたように、総勢およそ一〇〇名を数えるこれらの視察者は、レイトンヤリー、ロンドンの諸博士らに非常に類似したタイプの者たちで、ひとづかみにして崇高な感情に乏しくかつ俗物的であったとはいえ、彼らを一群の残忍な迫害者および通告者としてみなすのはミステイクというべきである。というのは、とくにこれらの活動的な数名のエージェントは、彼らと修道院との関係は全く別として、独力で出世し、みずからの地位を築いたオックスフォード大学かケンブリッジ大学出のみんながみんなインテリだったのであり、要するに、大法官 Audley や Rich 以来の政府のエージェント——つまり、へつらい、どうにでも曲がる日和見主義者たち——以上によくもなかったし、また悪くもなかった。ただ、見解が物質的で、ヘンリーないしはクロムウェルの恩恵を保持するためには、たとえ身内であろうと友人であろ

うと敵であらうと、区別なくいつでも訴え、破滅させる用意ができていたのではあったが、しかし出世も金銭もかわつていなか
ったときには、大変穩健で柔和な人々だったのであり、しかも、
ロンドン博士を除いて、全員が繁栄の中にその生涯を終えたので
ある。〔完〕

註

- (1) この遅れについての原因は不明。しかし、順序として十分の二税の基礎を準備するための調査委員にはつきりとした道を与えるために引き止められたことは確かのようなのである。またクロムウェルは、一五三五年の晩春は、カルトジオ修道会の審問および裁判、それにフィッシヤーとモアの裁判で忙殺され、そのために巡察開始の合図を与えられざるまで数週間遅れたらう。
- Cf. D. Knowles, *The Religious Orders in England*, Vol. III, Cambridge U. P., 1971, p. 268.
- (2) 羊や貯蔵品、つまり、最小限の困難で正金に換えられる資本は、修道院の丘原(Downs)や共同放牧地(Commons)から消えうせいであった。また土地は、長期間契約の重う上納金(Fine)で賃貸され、延金(Plate)や宝石(Precious Stones)は売却されるか、あるいは隠された。Cf. *Ibid.*, p. 268.
- (3) H. Maynard Smith, *Henry VIII and the Reformation*, Macmillan, London, 1964, p. 75.
- (4) D. Knowles, *op. cit.*, Vol. III, p. 274.
- (5) H. M. Smith, *op. cit.*, p. 75.
- (6) A. G. Dickens, *The English Reformation*, Schocken Books, New York, 1969, pp. 141-142.
- (7) G. Baskerville, *English Monks and the Suppression of the Monasteries*, London, 1972, p. 124.
- (8) T. Wright, *Suppression of the Monasteries*, Camden Society, 1843, p. 96, quoted in H. M. Smith.
- (9) A. F. Pollard, *Henry VIII*, Longmans, London, 1968, p. 270.
- (10) R. W. Dixon, *History of the Church of England*, 6 vols., Vol. I, p. 337. *et passim*, quoted by H. M. Smith, p. 76.
- (11) H. M. Smith, *op. cit.*, p. 75.
- (12) G. Baskerville, *op. cit.*, p. 125.
- (13) Philip Hughes, *The Reformation in England*, 3 vols., Vol. I: *The King's Proceedings*, Hollis & Carter, London, 1956, p. 284.
- (14) A. G. Dickens, *Thomas Cromwell and the English Reformation*, English Universities P., London, 1972, p. 128.
- (15) H. Ellis, *Original Letters*, three series, 11 vols., London, 1824-1846, Vol. III, 3, No. ccclii (1539年1月16日)° Cf. D. Knowles, *The Religious Orders in England*, Vol. III, p. 380.
- (16) F. A. Gasquet, *op. cit.*, Vol. II, Appendix V, p. 552.
- (17) マーティン・リッピンズ参照。
- (18) H. Ellis, *op. cit.*, Vol. III, 3, No. cclxxx, quoted by D. Knowles, *op. cit.*, Vol. III, p. 271, note 2.

しかしながら、レイントンはまた、カンタベリーで火事が起ったときにはみずから進んで行動をとるなど、進取

の気性に富んでいた。

- (19) P. Hughes, *op. cit.*, Vol. I, p. 284.
- (20) T. Wright, *op. cit.*, p. 157, quoted in H. M. Smith.
- (21) D. Knowles, *op. cit.*, Vol. III, p. 271.
- (22) 「政治史家が普通用いる資料は——なかでも、当時(テューダー王朝時代)引用者註)の人々から王に差し出された書簡はとくに——王や王妃に対する恐れはばかたお世辞に満ちている」(G. R. Elton, *Political History: Principles and Practice*, Basic Books, New York, 1970. 丸山高司訳『政治史とは何か』昭和四十九年 四二頁)。
- (23) レイトンが元氣のある書状を書きまくったとき、それらが来たるべき数世紀以内に修道士たちの公判や訴訟事件の評議を行なう際に主要な調書となることになつてゐるなどとは、彼は、予知し得なかつた。だが、事実上、それらは、おそらく調査結果書(*Comperata*)のそれ以上に、歴史家たちの潜在意識下の精神上に大きな影響をもつており、疑いなく後者を多く強めてゐるのである(D. Knowles, *op. cit.*, Vol. III, p. 272.)。
- (24) F. A. Gasquet, *op. cit.*, Vol. II, Appendix V, p. 562.
- (25) T. Wright, *op. cit.*, pp. 53-55, quoted by G. Baskerville, p. 125.
- (26) F. A. Gasquet, *op. cit.*, Vol. II, Appendix V, p. 551.
- (27) G. Baskerville, *op. cit.*, p. 125.
- (28) T. Wright, *op. cit.*, pp. 70-72, quoted in G. Baskerville. 実は大学の学生監たちが決してない遂げることができなかったものを、彼が国王の視察者として成就することになった。
- (29) D. Knowles, *op. cit.*, Vol. III, p. 272.
- (30) G. Baskerville, *op. cit.*, p. 126.
- (31) 「フーンオーク公は、ある場合にはリーを「邪悪な男」(vicious man)として描写した。
- (32) G. Baskerville, *op. cit.*, p. 126.
- (33) リーはケンブリッジ大学 King's College の他に、姉妹校であるヘートン校(Eton College)にも学んだようである。
- (34) State Papers, ix, 622-630, quoted in H. M. Smith.
- (35) リーは不道徳な修道士を告発したのみならず、自分が修道女たゝに行なつた不潔な提言についても有名な「Nicholas Sanders, *The Anglican Schism*, translated by Lewis, Burns & Oates, 1877. p. 130, quoted in H. M. Smith.)。
- (36) T. Wright, *op. cit.*, p. 57, quoted by H. M. Smith, p. 77; G. Baskerville, *op. cit.*, p. 126.
- (37) リーは、修道院の視察者として悪名を残した。リー自身の略奪する分担は、Cumberland の Calder ミナー修道院と Yorkshire の Nostell の修道院だった(P. Hughes, *op. cit.*, Vol. I, pp. 284-285.)。
- (38) P. Hughes, *op. cit.*, Vol. I, p. 284.
- (39) G. Baskerville, *op. cit.*, p. 126.
- (40) F. A. Gasquet, *op. cit.*, Vol. II, Appendix V, p. 550.
- (41) G. Baskerville, *op. cit.*, p. 126.
- (42) F. A. Gasquet, *op. cit.*, Vol. II, Appendix V, p. 563.
- (43) G. Baskerville, *op. cit.*, p. 126.
- (44) Ibid., p. 128.

- (44) D. Knowles, op. cit., Vol. III, p. 273.
- (45) F. A. Gasquet, *Henry VIII and the English Monasteries*, I vol., Bell, 1906, p. 83, quoted in H. M. Smith. われわれは、'ライス自身の書簡から'これは本當であると推断してよいだろう。
- (46) G. Baskerville, op. cit., p. 128.
- (47) F. A. Gasquet, op. cit., Vol. II, Appendix V, p. 548.
- (48) ライスは、いわゆる Sir Hugh Evans のパトロンとして文学史上に登場するが、これは間違いないであり、このときすでにライスは死に近づいたと思われる。
- (49) P. Hughes, op. cit., Vol. I, p. 285.
- (50) F. A. Gasquet, *Henry VIII and the English Monasteries*, I vol., p. 163, quoted in H. M. Smith. 例のロンドン博士が New College 財産の油断のなう行政官だったというのは、一五三八年二月二十一日付のクロムウェル宛てられた彼の書簡によつて示されている。その部分を抜粋すると、「私の College が Colerne (Wilts.) で所有してゐるきつような隷農 (Bondmen) を庇つて解放するやうにとの貴官の手紙におこたえたしますと、土地が隷農かのいすれかを疎んじますことは College の規則に違反いたします」(Letters & Papers of Henry VIII, Vol. XIII, (1), No. 324, quoted in G. Baskerville.) ところが、この種のことが近代自由主義とか革新主義的な諸傾向と結びつけて考えることは誤りであつて、これはむしろ逆に、ロンドンの隷農に対する思いやりから発したものと考えられる。
- (15) P. Hughes, op. cit., Vol. I, p. 285.
- (52) ロンドンが信仰していた宗教は、しきたり通りに保守的なものであつたのであり、Descartes によれば、おそらくそれは彼の王のもので、かつまた乳母のものであつた。
- (53) また、一五四三年におけるウインザーの異端起訴では三人のプロテスタントが焼き殺されたのであるが、この事件も主にロンドンが関係していた。
- (54) クロムウェルはこのことを知つてゐた。だが、ロンドンが大変へつらう人物であるということと学長であるということが彼を救つたようである。
- (55) Cf. John Foxe, *Acts and Monuments*, 8 vols., Cateley's edition, Seeley, 1841. Vol. V, p. 221 cp.; J. Strype, *Thomas Cranmer*, 2 vols., Clarendon Press, 1840. Vol. I, pp. 356, 375.
- (56) G. Baskerville, op. cit., p. 127.
- (57) Ibid.; T. Wright, op. cit., p. 228. 傍点は引用者。つまり、これにせよ、'ノーストン'よりはよい人物だったようである。書簡の一例(抜粋)を紹介するならば、「Northampton 近傍の De la Pre 女子大修道院の院長は王のためによく働きましたかなりの年齢のご婦人でうまいます……彼女らの年金のために、彼女とその貧しい修道女らにとうまつて慈悲深き主人であられますよう」といふやうに、修道女らに十分な年金の支給を批准するやうにクロムウェルは懇願してゐる (G. Baskerville, op. cit., pp. 127-128.)
- (58) G. Baskerville, op. cit., p. 127.
- (59) T. Wright, op. cit., pp. 40-49, quoted in H. M. Smith.
- (60) D. Knowles, op. cit., Vol. III, p. 274, note 1.

- (19) F. A. Gasquet, *op. cit.*, Vol. II, Appendix V, p. 552.
- (26) Cf. *Ibid.*, pp. 551, 549.
- (33) *Ibid.*, p. 559.
- (46) T. Wright, *op. cit.*, pp. 89, 98, quoted in H. M. Smith.
- (39) G. Baskerville, *op. cit.*, p. 129.
- (36) Cf. A. L. Rowse, *Tudor Cornwall*, London, 1941, pp. 187-193; D. Knowles, *op. cit.*, Vol. III, p. 273.
- (67) G. Baskerville, *op. cit.*, p. 128.

(一九七五・一一・八、提出)

付記

本稿(一)および(二)は、卒業論文の第二章第一、二、三節を改稿したものである。未完ではあるが、一応、与えられた紙幅が尽きたので、後半の発表についてはまたの機会を期したい。成稿にあたり、ご指導・ご助言を賜りました竹内直良先生に謹んで謝意を表します。